



ミンガラバー

認定 NPO 法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会

〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

歴史的な日 ミャンマーに いました。

協会理事長

岡田 茂

「半世紀以上続いた国軍中心の政治に終止符を打ったのだから、政変とはこのことでしょう」。ミンガラバー前号の編集後記の一節だ。読んだとき、私は戸惑いを感じた。それまで私の頭にあった政変とは、クーデターとか民衆の蜂起により政治形

態が全く変わったものになる、というイメージだった。よくよく考えてみると、ミャンマーの国民が自分たちで選んだ政府を持ったのは事実上初めてのことだ。政変といっても、あながち大げさではない。

ミャンマーが60数年にわたるイギリス植民地の束縛から離れたのは1948年。その後、総選挙による文民大統領は選出された経緯はあるが、政治の混乱は続き、62年からはネウインの軍政下になった。88年、ネウインは失脚したが、次の軍政が待っていた。

欧米・日本からの経済制裁に押された形で、政府は2010年に新憲法を公布。テインセイン氏が大統領に選ばれ、11年3月に民政移管された。しかし、この民主化の動きに対

文民大統領誕生 国民テレビに釘付け



新大統領が選ばれた3月15日(私岡田)は旧知の元保健大臣ケッセイン氏(左)と会った。右はAMD Aの首波代表ヤンゴン

して、本物がどうか世界はまだ疑惑の目で見ていた。その頃、「ミャンマーは大丈夫ですか」と多くの人が質問された。

一瞬間をよぎったのが「アラブの春」だ。アラブはその後、テロリズムで収拾がつかなくなっている。「ミャンマーの春」はどうか。私は「大丈夫と思う。民主化の流れは軍政が作り出したもの。もし、軍が何か起せば、自己矛盾を自ら暴露したことになる。間違ったことはしないだろう」と答えた。

事実、テインセイン政権は民主化を進め、経済改革にも取り組んだ。率直に言って、その業績は評価している。昨年11月の総選挙では、国民的人氣を誇るアウンサンスーチー氏が率いる政党が圧勝した。そして今年3月15日――。国民はテレビの国会中継に釘付けになっていた。興奮し、あるいは冷静に。半世紀を超えて文民大統領に

ティンチョー氏が選ばれたのだ。その歴史的な日にヤンゴンにいた私は、岡山に本部のあるAMD Aの首波代表と一緒に、ケッセイン元保健大臣と会っていた。ミャンマーで、私が1999年に「C型肝炎対策事業」を行い、AMD Aも小児病院を始めた時の大臣であり、10数年ぶりの再会だった。顔をほころばせながら思い出話をする元陸軍上級将校の姿には、現在進行中のことはすべて織り込み済み、という感じさえ漂っていた。

新聞僚が発表されたのは、帰国後だった。一番気がかりだった保健大臣にはミントウエ氏が就任した。WHO(世界保健機関)東南アジア代表をつとめていた医師である。この国の新しい保健行政を担うにふさわしいと思った。

新生ミャンマー

岡山大学病院 形成外科
教授(協会理事)

木股 敬裕

「今、変えなくては」 医学教育 日本への期待大きく



シンポジウムにはミャンマーの前保健大臣、岡山市長らも参加したヤンゴン

ヤンゴンで毎年開催される医学研究総会で、そのシンポジウムは行われた。1月8日、タイトルは「Medical Education(医学教育)」。岡山大学の塚愛二医学部長ら3人が日本と岡山大の医学教育の特徴について話し、ミャンマー側の2人がミャンマーの医療とその教育の極めて厳しい現状を訴えた。会場には、前保健大臣や保健省の各局長、そして医科大学の学長クラスらが勢ぞろいする盛況ぶりだった。

切実な訴え
シンポジウムはヤンゴン第一医科大学長のこんな言葉で終わった。「我々には、質の良い教育ができる資源がない。学生一人当たりの学費が月に800チャット(約80円)で何ができるのか。我々には変えなくてはならない。日本と岡山大学の

支援が必要だ。ミャンマーの医療を今こそ変えなくてはならないのだ。1月11日には首都ネピドーで、昨年4月から本格的にスタートした日本のJICA(A国際協力機構)支援による国立6大学(岡山、千葉、新潟、金沢、長崎、熊本)の「医学教育強化プロジェクト」の第1回日本・ミャンマー合同調整委員会が開かれた。基礎医学で12人、臨床医学で医師・放射線技師を含めて56人の合計68人の4年にわたる人材育成プロジェクトだ。

黎明期予感
翌12日、このプロジェクトを広く公報するためのオンラインセミナーがあった。各医科大学の学長、世界保健機関(WHO)のミャンマー代表を含む約130人の医学教育関係者と報道陣が集まった。岡山大学病院の横野博史病院長の挨拶、日本大使館の第一書記官の祝辞、既に研修済みのミヤ

ンマー医師の発表、そして熊本大学、長崎大学の教授による記念講演が行われた。活発な議論と協会の岡田茂理事長によるコメントもあり、ミャンマー側の日本に寄せる期待の大きさと同時に、両国が医学教育強化の重要性を強く共有できたセラモニーだった。ミャンマーが民主化へ大きく舵を切り出す中、医学教育関係者の今こそ動くべき時であるという強い信念が実感として伝わり、この国の医学教育の黎明期を予感させる数日間であった。オンラインセミナーの様子は同日夜の国営テレビで大きく報道された。

初めての旅、刺激的な体験

岡山学芸館高校の4人

岡山学芸館高校(岡山市東区)の生徒4人が3月上旬、ミャンマーへ出かけた。みんな将来は医療関係の仕事を目指し、初めてのミャンマーで医療施設を見学したり観光地を回ったり。刺激的な5日間の旅だった。

野口碧希君、石城戸瑠菜さん、大森彩音さん、藤井祐天さんの4人。いずれも旅行の時は1年で、今は2年生。森健太郎校長が引率し、校長と親しい協会の岡田茂理事長が案内役を買って出た。

まずヤンゴン郊外の下野クリニクへ。ここは協会が会員に呼びかけて各地に作った寄付クリニクの第1号。患者や出産も多く、地域医療に大きな役割を果たしている。



とが一目でわかった。しかし、敷地内にはゴミも散乱。生徒たちは清掃ボランティアをした。看護師さんは、これから見学した医療施設は計5か所。自閉症のケアセンターでは、子供たちと折り紙をしなから遊んだ。

岡山で以前、細胞診の研修をした女医の娘さんとその友人と一緒に寝釈迎像で知られる古都バゴの見学後、仏教聖地ゴールデンロックに1泊した。彼女たちも高校生。同世代同士の交流もできた。

大森さんは旅の感想文にこう書いた。

「医療機関の周りでも街中でもごみが絶えません。岡田先生がおっしゃっていた『この国はごみがなくなれば発展は自分たちできれいにできると話していた。』と同じ世代と交流

する』という言葉の意味を肌で感じました。私たちが清掃ボランティアをしているのを見ていた子どもたちがいから、ごみを外に捨てないでくれたら、本当にうれしい」

深い関わり実感

藤井さんは、建国の父と呼ばれるアウンサン將軍の執務室や日本人墓地を見学したことに触れ「ミャンマーと日本の深い関わりを実際に感じる事ができた」と感想。また、「自閉症の子供たちを預かる施設では一緒に折り紙をした子に『Teacher』と呼ばれた。笑顔を向けてくれて、折り紙を喜んでくれて、本当にうれしかった」と綴っている。

講演 手術 検診 岡山大中心に 医療支援活動

協会の呼びかけで1月初め、岡山大学を中心到大勢の医師らがミャンマーを訪れ、医療支援活動をした。

ミャンマー医学研究協会には岡山大から5人が参加。宮石智教授が専門の法医学(泌尿器科)が腎移植をテーマに講演。シンポジウムでは大塚愛(医学部長)と竹居孝(教授)と竹居孝(教授(生化学))、万代康弘(医療教育統合開発センター)副所長が日本の医療教育と岡山大の試みについて発表した。

手術指導に出かけたのは岡山大の形成外科、脳外科、麻酔科、整形外科、看護科のスタッフと、他に笠井裕一(三重大学教授(協会理事))の呼びかけに応じた佐賀、岐阜、三重大の整形外科を含む計21人。ヤンゴン、マンドレイ、モン州の3か所で4日間、現地医師に手術指導した。

口腔がん、1人が喉頭がんであることがわかり、また7人に異常所見と、発見率はきわめて高かった。

岡山大教授ら 検診方法指導 乳がんセミナー

2月16、17両日、ヤンゴン中央婦人科病院で乳がん検診セミナーがあり、岡山大学病院乳腺・内分泌外科の土井原博義教授、水島協同病院(倉敷)の石部洋一医師、放射線科技師の逸見典子さん、医療コンサルタント会社メディアヴァ(東京)のスタッフら9人が参加。各地から出席した医師や技師に検診方法の講義や技術指導をした。

協会だより

遠心機を寄付

医療機器メーカーの久保田商事(東京)から協会に、血液を分離する免疫血液学用遠心機が贈られた。協会は1月にヤンゴンで開かれた輸血関連セミナーで展示後、国立血液センターに寄付した。

2期生始業式に行つてきました

希望に胸ふくらませた生徒たちの瞳が輝いている様子を見てきました。3月12日の始業式には1期生も全員が駆けつけてくれました。皆様のお陰を持ちまして大勢の補助産師が育ちつつあります。この感激をどのようにお伝えしたらよいのか。本日に皆様のお陰です。今後ともご支援の程よろしく願ひいたします。(理事 西山央子)

機器の扱い、学んでももらいました

岡山大学病院
臨床工学技士

林 久美子



1月まで3ヶ月間、ミャンマーからひとりの研修生を受け入れました。国立医学研究局技術職員カインウインさん。彼の研修の目的



機器を操作するカインウインさん＝岡山大学病院

去年1月にミャンマー医学研究総会のシンポジウムで、日本の臨床工学技士について話をさせてください。たのがきっかけでした。もちろんミャンマーには臨床工学技士という資格はなく、世界でもこのような国家資格があるのは日本だけ。来日前にどのような資格を持っているのか、どのような仕事をしているのかなどの情報はありました。研修は手探り状態でスタート。研修は高度救命救急センター集中治療室(EICU)を中心に、医療機器管理センター、血液浄化センターで

も行いました。指導には同僚の平山隆浩さんも一緒に加わりました。最も危惧していたのは会話で、ともに英語は母国語ではない。それでもお互いが何とか理解しようという気持ちには通じました。次に心配だったのは、ミャンマーではどの程度、医療機器について学んでいるのか、その理解度がわからなかったことです。多くの機器は初めて見るものばかり。その操作、清掃、点検などは問題がなかったのですが、医療に関することを学んでいないのには難渋しました。幸いなことにミャンマーから2名人の医師も岡山大学病院で研修中だったので、

その医師からミャンマー語で伝えて、インターネットも利用しました。京都や姫路城に出かけ、食事にも行きました。1月に雪が降り、生れて初めて見る雪に寒さも忘れていたようで、触れたり写真を撮っていました。よほど嬉しかったのでしよう。

研修最後の日、印象的だったのはEICUを去る時に出口で深々とお辞儀をしていたことです。日本人でもそんな姿は見かけることは少なくなりましたが、彼にはよほど感慨深いものがあったようです。日本での研修が一つの財産となり、ミャンマーの医療を支える礎になることを祈ります。

3人に寄稿してもらいました。半世紀ぶりに文民大統領が誕生した、その日にミャンマーを訪れた岡田理事長。年初に訪れて医学教育界の主だった顔ぶれに会ってきた木股理事。2人の文章から新生ミャンマーの息吹が伝わります。もう1人は岡山大学病院臨床工学技士の林さん。協会が招いた初の技術職員を指導した報告です。これまでミャンマーからの研修生は大半が医師でしたが、今後は看護師、薬剤師、介護士などの医療スタッフも広がります。その多様な研修ぶりも順次紹介します。(西崎)

編集後記